明海大学 不動産学部

# 不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第231回

## 100メートル道路

# 都心部空地のあり方が変化

本多 颯太
不動産学部2年

【学生の目】

観光で訪れた名古屋で最初に目に入ったのは道路だ。名古屋は道路が広いと言われているが全体的な印象としては車線が多い。また、直線道路が整然としている。

調べると、政令指定都市で道路率が最も高いのは名古屋市だ。

広い道路の代表は中区にある久屋大通だ（写真）。横幅が約100㍍あることから、「100㍍道路」といわれる。道路の中央部分の久屋大通公園には、クスノキで統一された景観があり、モニュメントや噴水が配置されている。そこにはスケールの大きな空間と豊かな緑がある。また、品位があり洗練されたデザインの街並みに、にぎわい、憩い、親しみを感じた。

名古屋で道路が整然と整備されたのは、戦災復興に土地区画整理事業を熱心に採用し、公共施設として道路を積極的に造ったからだ。その際、大火が起きても街全体が焼失してしまわないよう、延焼遮断帯として広幅員の道路を南北方向と東西方向につくった。久屋大通は南北方向の100㍍道路だ。

久屋大通は1949年に工事が開始され、テレビ塔が開業した55年頃に形が整った。中央分離帯部分は次第に公園状に整備され、70年に都市公園法の都市公園となった。70年代後半には地下鉄、地下街や地下駐車場の整備に伴い、地上の広場をテーマごとに区分して改修した。さらに、市制100周年の89年には設計コンペを開催し、優秀作品に基づいて改修された。

このように継続的に改修をしてきた結果、いろいろな広場やモニュメントがあって樹木も多い半面、芝生や草花が少ない。都心では土地の高度利用が必要だが、その分、都心の公園では何もないオープンスペースの価値が高まる。久屋大通公園は公園そのものも都心化されていて、広がり、美しさや憩いといった都心の公園に求められるものが失われていると感じた。

もともと延焼遮断帯として造られた100㍍道路だが、建物の耐火性能や防火性能が高まったことから、今では地震時の避難場所としての役割のほうが大きいと思われる。延焼遮断帯と震災避難場所では求められる機能が異なる。多くの人が一定期間過ごす避難場所として、写真のような立体的な造りかたでよいのだろうか。立派に整備された100㍍道路を見ながら、都心部のオープンスペースのあり方の変化を考えた。

100㍍道路の役割は時代と共に変化する

【教員のコメント】

土地区画整理事業を多用して道路網を整備する手法は復興の手本である。一方、防火のための広い道路は繁華性も分断し、広い道路を生かした地下街も地上の活力を削ぐ。街の魅力の一体化と変容する都市防災のために、公園の再生が求められる。